

# し尿の汲取り業の話

いし い あきお  
ごみ文化研究部会 ◆ 石井 明男

高杉さんに初めてお目にかかったのはNPO法人日本下水道文化研究会の「し尿研究会（現在のし尿・下水道研究会\*1）の定例会であった。

2001（平成13）年9月の定例会は高杉喜平・由栄さんご夫妻をお招きして、「汲取り一代記」とでも呼べるようなお話で出色であった。今回はこの高杉さんのお話を中心に当時の汲取り業をかえりみたいと思う。

お話は高杉さんが復員された1948（昭和23）年から始まり、1992（平成4）年あたりまでの話であった。戦後まもなくの1948（昭和23）年ごろは東京に人々が戻り始めて人口が急増し、し尿処理が再び問題となってきたころである。

当時の東京のし尿処理の状況は、汲取ったし尿を貨物輸送などにより農村部へ還元したほか、一部を下水道へ投入するとともに、1950（昭和25）年からはし尿の海洋投棄を再開している。これらの処理と並行して、GHQ（連合軍総司令部）の指導により政府の資源調査会は、「屎尿汲取りの機械化と屎尿資源の科学的衛生処理、屎尿と下水道との合同処理」を検討していた。そ

の結果をまとめ、1950（昭和25）年、「屎尿の資源科学的衛生処理に関する件」として勧告書を政府に提出した。内容は、汲取りの機械化収集とし尿の科学的処理法としては、嫌気性消化法が最善であると報告している。この勧告後、各地でし尿はひしゃくによる汲取りから次第に機械化収集に切り替わっていった。東京都では1957（昭和32）年にし尿機械化収集計画を開始し、1960（昭和35）年に完了している。また、東京都はGHQの勧告によるし尿の衛生的な処理施設とした「し尿消化槽」を1951（昭和26）年から下水道局砂町処理場内に建設し、1982（昭和57）年まで稼働した。

また日本古来の「便所のシステム」もこのころから大きく変化している。1956（昭和31）年に政府は、「し尿処理基本対策要綱」を5カ年計画の形で打ち出し、海洋投棄の原則的廃止、総水洗化を目標として、公共下水道の整備、し尿浄化槽、コミュニティプラントによりこれを達成し、収集したし尿は「し尿処理施設」で処理をするというものである。これを契機に昭和30年代（1955～64）の嫌気性消化処理、化学処

理というように各種のし尿処理技術が発展した。また、昭和40年代(1965~74)に国民の水洗化の要求に対して個別処理としての浄化槽も爆発的に普及した。しかし、単独処理浄化槽は放流水質が悪いので、下流の水利組合からの放流同意が義務づけられたり、同意にあたっては高額の放流料金(汚し賃)が要求される



天秤棒の前と後にぶら下げた肥桶

など多くのトラブルが発生し、「浄化槽法」の成立の伏線になった。

もう一つの潮流としては、し尿の受け皿としての下水道があるが、1955(昭和30)年の東京都区部の下水道普及率が16%であり、これがわずか10年経った1965(昭和40)年には35%になった。清掃事業としての汲取りが急速に縮小されていった時期でもあった。

一方、当時は大正末期から化学肥料の進出によりし尿の肥料的価値が次第に薄れてきた時期でもあり、し尿の肥料としての利用は激減していった。

このように、高杉さんが汲取りの仕事をされていた時期は、歴史的に見るとし尿の収集や処理が激動した時期でもあった。

## 汲取りを始めたころ

高杉さんは1947(昭和22)年、23、4才のころ復員して東京の小平で家業の農業を始めた。しかし当時、農業に必要な肥しこやが手に入らないということで、

最初は杉並の友人の家で汲取らせてもらい、その後汲取りの軒数はだんだん数が増えていき、100軒ほどの家の便所の汲取りをしていたという。高杉さんは汲取りについて「便壺に溜まっているし尿をひしゃくで汲取って、肥桶に入れます。ひしゃくは1回で2升(約3.6ℓ)ほど汲めます。汲取り口を汚さないように汲取るのがコツです。だんだんと慣れてじょうずに汲取れるようになりました。2つの肥桶を天秤棒の前と後にぶら下げてリヤカーまで運びます。こぼさないようにバランスをとって歩くにはコツがあるので、慣れるまでは大変です。私は百姓の出ですからじょうずでしたよ。2斗入りの肥桶を一人で荷馬車に載せました。これも力だけでなく、コツがあります。

一生懸命に気をつけて汲取り作業をしても、苦情を言われることがたびたびありました。“明日からもうやめてしまおうかな”と思ったことが何回もありました」と当時のことを話された<sup>#2</sup>。

## 汲み取った し尿の運搬機材の変遷

また当時どのような機材で作業されていたかを伺うと、「昭和23年に馬を買ひ、7年間ほど荷馬車を使いました。荷馬車ですと、1回で36本の肥桶を載せることができました。肥桶を積む方式ですと、馬がなにかの拍子であればると、積み荷が一方に片寄って大変でした。ロープで結わえて片寄らないように工夫しました。そこで、しばらくたってから荷馬車の荷台に大きな木製の水槽をくり付けける方式にしました。肥桶36本分が入るぐらいの大きさです。肥桶の蓋をうまく使って、肥桶のし尿を少しずつあげ換えるのです。

昭和27年ごろ、2t積のオート三輪車も買いました。肥桶を12本積むことができました。しばらく、荷馬車と併用しました。昭和36年に、バキュームカーを購入しました。値段が高くて、(25万円程度)地所を売ってお金を用意しました。そのころのバキューム用のホースは、今みたいにビニール製でなく、ゴム製で重かったので、肩に担いで運びました。道路の奥の方の家の場合は、ホースを何本もつないで伸ばして使いました。慣れないとうまく吸い取れません。しかし、慣れたらこんなに良いものはないと思いました。アツという間にし尿を吸い込んで便壺をきれいに保つことができますから。汲取り口の回りは石灰を撒いて消毒してお



牛のひく汚い車(こえ車) (提供：毎日新聞社)

きました。汲取りの際に出る臭気については、地元の自治会からいろいろ苦情を言われました。特に、“バキュームになってからは臭いが強くなった”と。それで、バキュームカーの排気口に脱臭装置をつけましたが、効果はあまりありませんでした」と話された。

## 当時の汲取り業の状況は

また当時のし尿の汲取りの状況について伺うと、実際にやっていた高杉さんでないと語れない話が次々と出てきた。

「昭和26年当時、小平で汲取りをやっていたのは100人ほどです。みんな農家です。自分の農地で使う分を東京方面に、知り合いを頼って荷馬車で汲取りに行っていました。農家汲取り組合を作って地盤の協定を行っていました。し尿の汲取りは、なくてはならない必要な作業でありながら、それを専門にやる人が三多摩にはほとんどいませんでした。

最初のうちは、どこへ行っても“うんこ屋”と言われました。子どもたちにもつらい思いをさせたようです。私は、後にいろいろなボランティアの会長やPTA会長(この他に、民生委員、都の交通安全協会副会長を歴任)をしましたが、“何だPTAの会長がうんこ屋かよー”との声も聞かれました。しかし、私は“誰かがこの汲取り作業をしなければならぬ”と思い、がんばって続けてきました。下肥が足りなくて困っているときでしたので、農家の人はみんな喜んでくれました。

しかし、そうこうしているうちに、化学肥料が普及し始めて、農家も昔ほどは下肥を必要としなくなりました。あちこちの畑で下肥を使わなくなってきました。“なんで、だまってし尿を肥溜めに入れて行くんだ”と言われだす始末です。

こうなりますと、営業的にはほとんど儲かりません。役所に相談に行っても、初めは“自分の商売のことは自分で考えたら”と言われるだけでした。しかし、そのうち、“これでは生活していくのも大変でしょう”と役所の方でも気の毒がってくれるようになりました。そして、“こんなに汚い仕事をみんなのためにしているのに、タダで汲取ることはないですよ”ということになり、“肥桶1本いくらということで、汲取り手数料をもらえるようにしましょう”ということになりました。肥桶1本につき5円とか10円とかです。このころは現金でもらいました。

普通、1桶に2斗(約36ℓ)入ります。しかし実際には、業者によって肥桶の大きさはまちまちで微妙に違っていました。そこで、汲取り手数料をもらうようになってから、役所の方で統一した大きさの肥桶を作って、私たち汲取り業者がそれを購入することになりました。

## し尿の捨て場の苦しみについて

し尿処理の技術が不十分で処理施設などほとんどない時代、処分場についてどのようにされたかを伺うと本当に大変だったことが分かる。

「そのうち、砂川全域(旧農家を除く)のし尿の汲取りを町から頼まれてやることになりましたが、“捨て場は自分で確保しなさい”ということになりました。

その当時は、汲取ったし尿はもうそんなには売れませんでしたから、砂川と村山との境の土地(湖南処理場の裏あたり)を1,000坪ほど買って素掘りの穴を掘り、自前の捨て場を確保しました。自己処分地と言っていました。穴は砂利の層が出てくるまで掘り下げました。砂川ですと15~6mほど掘りました。昭和33年ごろの話です。これで、ひとまず安心ということになりました。汲取り量が増えてきたので、他に捨て場を造りたくても簡単には土地が得られない状況になってきましたが、捨てたし尿は少しずつ地面に吸い込まれていったので、穴がいっぱいになっても時間がたつと、また後から追加して捨てることができました。し尿の表面は

10cmくらいスカム<sup>※3</sup>が溜まっていて、カチカチになってペンペン草が生えているほどです。新たなし尿をその穴に捨てる場合は、表面の固まったスカムの一部を壊して、そこから捨てました。

三多摩の大きな市町は、それぞれ、自治体所有のし尿の捨て場を持っていましたが、臭いとか、…… なにかとその周りの住民から苦情を言われるようになり、いろいろ相談してし尿の処理場を造ることになり、立川は昭島あきしまと一緒に、昭島処理場を建設しました。立川には既存の汲取り業者が2社ありました。砂川は立川とすでに合併していたので、本来ならばその処理場を使えるはずですが、いろいろな経緯で継子扱いままこにされ、“砂川は汲取り業者が持っている処分地に捨てる”と言われ、大変苦しみました。なんとかお金を工面して日産自動車の工場のそばの350坪ほどの土地を買い、捨て場用の穴を掘り、土手も造りました。昭和38年ごろのことです。ところが、そこに初めて、バキュームカー1台分のし尿を捨てたところ、その日のうちに武蔵村山市の市長さんと議長さんが私の家に来られ、“あそこにし尿を捨てるのはやめてくれ”とのこと。仕方がないので、その捨て場の使用は断念することになりました。その後、“どうしようか”と役所でも議論が重ねられ、新聞にも報道され、大騒ぎになりました。結局、“日野の処理場に入れさせてもらう”ことになりました。

日野までは立川を抜けて日野橋を渡ってズーっと行くのですから、遠いのですが仕方ありません。昭和40年ごろ、バキュームカーを5台使って汲取っていました。午後に汲取った分は、処理場側の受け入れ時間(午後5時)外になってしまいますので、砂川一番と二番の今の横田基地の横の農地を貸してもらい、そこに穴を掘って捨てました。借り賃はいくらでも良いということでした。しかし、そのうち周りに家が建ってきて、地主から“もうやめてくれ”と言われ、そこもだめになり、他の農地を探しました。

捨て場の確保は農家に頼っていました。農家の人には本当に感謝していません。あちらこちらの農地にし尿を捨てさせてもらいましたから。

後に昭和46年になってようやく、昭島処理場に汲取りし尿を搬入できるようになりました。このころ(昭和46～49年)は、捨て場の心配もなく、砂川地区を6台のバキュームカーで走り回ってし尿を収集していました」。

## 汲取り業の経営について

汲取りの経営については、「汲取り手数料を取っていないときはサービス業として扱われ、税金は取られませんでした。手数料をもらうようになってからは、税金を払うようになりました。会社組織にしたのですが、なかなかこのような仕事に就いてくれる人がいなくて、従業員の確保には苦労しました。

夜、一軒ずつ訪ねて頼んで歩くような状況でした。“お願いします、お願いします”と。従業員には本当に一生懸命働いてもらいました。朝早くから日が暮れるまで、ありがたいと思いました。

下水道が普及して水洗トイレとなり、汲取り量がだんだん減ってきました。“高杉さんは一番たくさん汲取っているのだから、他の業者に少し回してくれないか”と役所の人に言われ、昭和50年から1台また1台とバキュームカーの数を減らされました。本当に辛かったです。結局、平成4年で2台の保有に、さらに今では1台になってしまいました。まだ、水洗トイレになっていない家が残っていますから、し尿の汲取りをやめるわけにはいきません。

このような状況の中で、“先のことを考えて、新しい仕事を始めたら”とのアドバイスを役所の人から再三、受けました。そこで、近くにブリヂストンや日立製作所がありましたので、その浄化槽管理の仕事を手がけるようになりました。浄化槽を管理するには資格が必要でしたので、一生懸命勉強して資格を取りました。

砂川地区に未水洗トイレの家が531軒残っていますので、バキュームカー1台を使ってし尿を収集しています。汲取り件数は延べ年間5,000便槽。し尿汲取りの同業者は6社残っていましたが、採算が合わないので皆やめてしま



東京都清掃事業部のバキュームカー（提供：毎日新聞社）

いました。

また、最近、ある地域で“一部どうしても下水管を引けないところがあるので、バキュームカーを1台用意しておいてください”ということになり、新たに購入しました。

阪神淡路大震災を教訓にして、バキュームカーなどの災害時の緊急対策用資器材をストックしておこうということで、多摩地区関係の委員会をつくって検討しているところです」。

このような話はなかなか聞く機会がない。貴重な体験談だと思った。

- ※1 し尿研究会はし尿にまつわる文化的なことやし尿の処理の技術的な考察など会員が独自に考えたり調べたりした成果を発表したり、時にはゲストを招いて、講話を聞くなどの活動を続けている会である。連絡先は《akio\_ishii@mbr.nifty.com》
- ※2 この当時の汲取りの様子や肥桶を担ぎ、町なかを集められた桶を並べ、積み替える様子は、かつては日常的に見られたが今日では見られない。その様子を記録した映像「し尿のゆくえ」（日本環境衛生協会製作、厚生省監修、1960年）がある。
- ※3 有機物が腐敗、発酵することで発生するガスによって繊維質や油脂質などが浮上してできるスポンジ質の厚い膜状の浮きかすのこと。